

東京ビデオフェスティバル2015 「集まれ！映像作家たち」トークフォーラムを開催

TVF入選作品作者を囲んで、市民ビデオの可能性をトコトン語り合った1日

「市民がつくるTVF」は1月18日、「TVF 2015トークフォーラム」を開催、市民ビデオ作者約50名が参加、それぞれの作品を巡って感想や意見を述べあった。ナビゲーターは小林はくどう、佐藤博昭、下村健一の各氏。ゲスト：一柳道隆（『月刊ビデオサロン』編集長）。（まとめ：前田義寛）



下村健一（TVF理事） このイベントは参加された皆さん同士で皆さんの作品について大いに意見を交わしていただく場です。単に作品の内容を説明するだけでなく、その作品をどのように描いたのか、どういう思いで制作したのか、などを語っていただきたいと思います。「温泉に、あかりをつけて。」の白石さんから始めましょう。

白石拓也（稚内北星学園大学） 私の住む町豊富町は昔はずいぶんにぎわった温泉の街ですが今は街全体が停滞しています。地域がどんな悩みや問題を抱えているのかを映像を通して表現しようと思いました。はじめはネガティブなイメージが濃かったんですが、イベントを開催する過程を描いてくうちに必ずしもネガティブでないポジティブな面も見えてきました。町のイベントには昨年の倍の400人が参加したんです。

蒲 広樹（市民ビデオ作者） 私も以前東京郊外の町で歌舞伎芝居の復興に取り組む町の人たちの姿をビデオカメラで追いましたが、お金が足りないので空き缶を回収してお金を作ったりしました。NPO法人の協力もあり、高齢者から子供まで、世代を超えた交流の感想も聴けたのがよかったと思います。

津田（TVF理事） 作品を見て市民がどれだけこの問題に感情移入できるかが作品のきめ手になるでしょうね。蝶の生態カットに感情を移入する人も多いでしょう。

下村 問題提起型の市民ビデオは、見る側が頭で理解するという面と、心で聞く面があるのでしょうね。

小林はくどう（TVF代表） 市民ビデオでは環境問題について取り上げた作品がこれまでもいろいろありました。15年前の大賞作品「**ダムの水はいらない**」は地域住民と行政の対決を描いた作品ですが、行政訴訟の証拠に採用されるなど話題となりました。作品を創る過程で「**この指とまれ**」が1本から2本、3本と広がっていったんです。

木下（TVF事務局長） 私は秦野に住んでいます。昔は散歩していると鹿に出会うくらい自然が保護されていたのに、近年は自然保護という丹沢だけがクローズアップされ、渋沢の自然を守るという意識が希薄になってきました。

小林 御法川さんの眼差しが昆虫ビデオから社会派的作品へと変わったところがおもしろい。それは作者の生き方の問題でもあるのかもしれない。作者は、はじめは点として蝶を描いてきたが、今度は社会の問題に杭を打ち始めたと思えます。

下村 「銃を置いた兵士たち」ですが、作者は現地の取材で、メディアの人に断られるなどいろいろあったようです。なぜ封印しようとするのか、そこにも一つの問題があります。

御法川 私の自然観察のルートが開発によって消えてしまうということを聞いたのです。秦野

で聞くと、沖縄戦の体験談は10人いれば10人違うと聞きました。「銃を置いた」話は、沖縄住民には「関係ない話だ」と言われました。沖縄のジャーナリストは「評価に値しない話だ」というのです。

下村 「大型書店がやってきた」は、まず題名に惹かれますね。いったいどんな作品だろうかと興味を持たせますね。

有沢洋一（市民ビデオ作者） 町の人口が減っていく中で本屋さんが次々と撤退していくんです。活字離れという現象もありますから。町の主婦たちが、中学生たちが本屋がないと困るということを知って動き始めるのです。主婦たちの応援で三省堂書店が店舗をだすことになりました。私はそのいきさつをビデオに撮るという形で主婦たちの活動をサポートしたのです。関係者に見てもらったところ「プロの映像より心が伝わってくる」と喜ばれました。

佐藤 戦争を知る世代がだんだん少なくなっていく現実の中で、旧日本軍兵士の生々しい記憶を捨てていく作業は非常に困難があるだろうと思います。

宮城道良（同朋高等学校） 私は歴史教育に携わっていますが、こういう作品こそ中学、高校の教材として教員はほしいのではないかと思います。TVFとして「平和教育教材」として販売してもいいのではないのでしょうか。

佐藤 島が地図から消えただけでなく、旧陸軍としての毒ガスの存在そのものをなかったことにしようという意図もあったのでしょうか。

下村 高校生をつかった「太平洋戦争、中国の2つの戦場」に行きましょつか。

松田 太平洋戦争の作品で高校生があそこまで問題に迫っていったのはすごいですね。衝撃的な証言も飛び出しましたが、よく発言してもらえたものだと思いました。

佐藤 高校生の皆さんが、どのようなプロセスでこの問題と出会ったのか、教育現場として戦争と平和についてのようにならしているのか、関心があります。「戦争」について教えても「戦場」については教えないとも言いますが。

宮城 確かに「戦場」について教えていないかもしれないですね。戦場は「生と死」ではなく「死と生」であって実際は「死」だけなのです。そういう事実を生徒たちにどのように教えていくか、私たち教師の大きな課題です。一部では、「戦場」や「性教育」を教室で語れないという教師もいます。

佐藤 これは社大な物語ですね。教材ビデオとしても使えるような作品です。いろいろなテーマが詰め込まれています。パート1、パート2に分けてもいいくらいです。

福住尊真（市民ビデオ作者） 木曽川のきれいな清流から生まれた水が下流でさまざまに使われていくという姿を描きたかったのです。確かにあれもこれも情報量は多すぎたかもしれません。制作にあたっては映像素材を生かすことを心がけました。プロならそのあたりをうまく処理するのだろうと思います。

小林 作者は何を伝えたかったのか。伝えるために必要なカットは何か。余計なカットをそぎ落とすっていくことですね。市民ビデオの制作では「捨てる」ということも大事です。

下村 「戦争」を主題にした作品に移りましょう。

佐藤 戦争は極めて大きなテーマです。総論的に取り上げるのは無理があるでしょう。そこで、



宮城 戦争のシーンとしてアメリカ側の素材を使うか、日本側の素材を使うかで違ってきます。映像には弱点があることも知っておく必要がありますね。

内田 空襲を体験した世代も少なくなってきました。熊谷では昭和20年8月14日、終戦の前日に空襲があったのです。米軍機が飛んできて熊谷の空が真っ赤に染まったことを鮮明に覚えていますが。私の世代は間接的ではありませんが戦争を語るることができます。

小林 描いた絵が効果的に使われています。昔、NHKの番組で市民が描いた原爆の絵を集めたのがありました。丸木位里さんの「原爆の図」が知られていますが、「私の原爆体験」を絵で表現したのが印象的でした。

鈴木将敏（同朋高等学校） 私は東京大空襲で死んだ中学生のことをビデオ作品にしましたが、東京大空襲の5年前に日本は重慶を爆撃しました。戦争には加害と被害の両面があるのです。戦争を語る世代は今や人口の17%しかいないといえます。70代、80代の人たちが戦争の問題を語って孫の世代やそのあとの世代に伝え残していくことが大事ですね。ビデオを通して伝えていくのが自分たちの役割だと思っています。

津田 ゴスベルも面白かったですが、これもいい作品ですね。かわいい子どもの動きを巧みに描いていますね。

小林 父と子の関係がほのぼのと描かれているのがすばらしい。

鈴木 私はかつて車椅子の生活をした時期がありましたが、一般には車椅子の人に話しかけにくい雰囲気があるものです。この作品では健全な子供が車椅子に乗ってはしゃぎますが、他の人が見てどう感じたのか気になりました。

湯本雅典（市民ビデオ作者） 在日女性の描いた絵が端端となり広島と福島がつながっていくという作品です。戦争をどのように伝えていくかは難しい面もありますが、人との繋がりが大事だと思います。3.11以降、「絆」という言葉がたくさん使われましたが、表面的つながりではなく本当の意味でのつながりが今求められています。簡単につながらないのも事実です。

佐藤 この作品ではつながりの媒体は絵です。一枚の絵からいろいろなことが想起されていくのです。絵には伝える力があるのです。

松田 原爆の絵でも丸木位里さんの絵は芸術作品として鑑賞できますが、先ほどの広島市民が描いた絵には市民の心を打つものがあるのです。

川本 作品を創るとき、絵には力があると感じました。映像は時代とともに進歩しましたが、昔の白黒映像にはカラーと違った意味がありました。取材で沖縄に行ったとき、北海道の学生が2、3日で沖縄戦の真実がわかるわけではないという声も聴きました。私たちに「戦争ってこんなこともあったんだ」と知るだけでも驚きでした。

小林 「絵手紙に綴られた東日本大震災」も「心の復興」に通じる作品ですね。

小川 「川口クワイヤガールズ」の加藤さんと木下さんから伺いましょう。

小村 3.11のことも、時間の経過とともに風化していく部分もありますが自分たちの作品を通じて伝えたい、残したいというのがうれしいですね。映像制作には苦労もあったでしょう。流された手紙をどう表現すればいいの。いろいろ工夫がありますね。「**水車の里 街角に在り**」もいい作品でした。

蒲 私は街中で出会った人やグループとの交流

の中でキラッと光ったものを作品の題材としています。81歳の花屋さんとの出会いもそうでした。都会の中で風車が回っている光景に惹かれて作品に仕上げました。それまで無関心だった息子が「なかなかいいじゃない」と評価してくれうれしかったですね。

小林 81歳の人も、この作品を見て改めて自分自身に自信が持てたのじゃないかな。作る過程で相手と共感し相手を作品のパートナーにしてしまう。作品の完成で幸せ感を共有するなんてすばらしいね。菊竹さんの「**愛すべき人びと**」は「臉の父」に会いに行くという作品ですが事情により公開されていません。

福垣敬一（とよたビデオリポーター） 「わが町とよた」として平成2年から定点観測ビデオを作っています。町の風景の変化から、商店の店舗や看板の変化、街を歩く人のファッションなど、目に入るものすべては時間と共に変わっていくことがよくわかるのです。

高見悦子（とよたビデオリポーター） TVFの作品を拝見して「映像の力」とともに「家族のつながり」の強さみたいなのがよく伝わってきました。結局、この作品は私自身を撮っているんだと気づいたんです。

津田 映像を見ていると、あなたのお母さんも、お父さんも、そして自分自身が揺れていることがよくわかります。家族には別の意見があるだろうが、あなたが「撮ろう」と思った意識は間違っていないと思いますよ。自分なりの捉え方をしています。

小林 「愛すべき家族」というのが、自分だけが「父も家族」と思っていた。だが、実際には父は家族に入っていないというのが現実だった。難しい問題ですね。この作品は作者の都合で公開されていませんが、ネット配信の時代、市民ビデオ作品のこうした微妙な作品をどこまで公開していけるのか、一つの課題です。

佐藤 市民ビデオ作品は、実はカメラを向ける瞬間に危険というリスクが伴っているということを知っておくことです。ある場合には相手を追い込んで傷つけてしまうことだってあるんです。家族は身近な存在だけに、場合によってはリスクが伴うのです。

内田一夫（市民ビデオ作者）「**心満たす爐**」はストーブづくりの名人の話ですが、きっかけは「新」のシーンを撮りたくて探していたらストーブ屋さんとお会ったのです。ストーブのPRのように見えますが、作品を作るときはモチーフやテーマを見つけることも大事ですが、作品としての1本のレールをきちんと敷いておくことが大事だと感じています。

小林 市民ビデオで大事なことは「私」の視点です。自分自身が抱えている「私」の問題の中にそれぞれの人間性や世界観が見えてくるのです。「**コアジサイ 楽園の悲劇**」は石倉さんらしい作品でした。

小林はくどう氏

石倉康雄（市民ビデオ作者） 私はずっと鳥ばっかり撮ってきました。生きている鳥ですから何が撮れるか予測できないのですが、写真では表現できないところがビデオでは撮れるのが楽しいですね。

仙波 晃（市民ビデオ作者） 父が遺した8mmフィルムがたくさんあり、私としては自分が元気なうちにこれを素材に作品を作っておかねばという気持ちが強くなっていきました。私は数年前、病気になる「作らねば」と思い、父が遺した映像を確認していくような気持ちで作品を作り始めたのです。

小林 仙波さんの作品は過去の映像と現在の映像を対比したり重ね合わせたりしながら独自の作品に仕上げていますね。

一色 このトークに参加するとき、果たして人が集まるのか、果たして建設的な意見が出るのなのか、不安があったことは確かです。でも、参加してみたら世代を超えて、若い人が高齢の人の作品の話を実際に耳を傾け、高齢の人が高校生の作品を評価したり、素晴らしい集まりでした。それに、市民ビデオの作り方が良く解りました。

福垣敬一（とよたビデオリポーター） 「わが町とよた」として平成2年から定点観測ビデオを作っています。町の風景の変化から、商店の店舗や看板の変化、街を歩く人のファッションなど、目に入るものすべては時間と共に変わっていくことがよくわかるのです。

高見悦子（とよたビデオリポーター） TVFの作品を拝見して「映像の力」とともに「家族のつながり」の強さみたいなのがよく伝わってきました。結局、この作品は私自身を撮っているんだと驚かされました。

百瀬秀俊（松商高等学校） 私は放送部員たちに「一つの番組は百の知識から」といっています。それと先入観を持ってコンテを作ってはいけません。撮った後で考え、構成しない、といっています。

一柳道隆（ゲスト） TVFの作品の水準の高いことに改めて感動しました。テーマの取り上げ方、作品の構成、撮影・編集とも、素晴らしい出来栄の作品でした。これからも市民ビデオが発展していくことに期待しています。

小林 市民ビデオを作る人、見る市民、放送部員とを指導する先生、地域社会でビデオを活用している人、今日は様々な立場で「市民がつくるTVF」の活動を指示してくれる皆さんが集い、市民ビデオの持つ力の大きさとひろがる可能性、皆さんの対話から市民ビデオの素晴らしさを確認できたと思います。ありがとうございました。



小林はくどう氏